

120周年を目指して

学院長 後藤 幸男



後藤学院長

再任されてから早くも一年が経過しました。他大学に行っていました四年間にいろいろ大きな変化がありましたが、特に教職員のほぼ全員が一致して私学間競争に勝ち残らなければ、という意識をもっていったことと、かつての労働組合至上主義が姿を消し、労使間の話し合いがスムーズに進むムードが醸成されていたことに驚かされました。

一方全然変わっていない筆頭は、昔ながらの観光バスの駐車場?かと間違える光景であり、またいくつかの「オンボロ校舎」(大学ばかりでなく、二つの中・高等学校、幼稚園も同様、小学校は一部西館のみ古いまま)でした。さらに財務状況に目を落とすと、各学校園とも「財政ピンチの連続」で、一向に改善策が講じられた形跡が見えなかったことです。

ですがいつまでもビックリばかりしているわけには参りません。早速執行部の皆さんと相談し、「行動する追手門」を標榜して五年後の創立120周年を目指した「総合改革プラン」(略称戦略一〇〇)を立てました。これは今後の学院の進路を示すばかりでなく、二十一世紀の社会の中核を担って活躍する「創造性と国際感覚豊かな人材の育成」を目指した画期的な計画です。その柱として私は次の五点をあげたいと思います。

- (一) 独立自彊の精神の昂揚
- (二) 各学校園のレベルでの教育改革
- (三) 特に大学での研究体制の強化とそのための組織・システム改革および時代の要請に応える学部学科の改組転換や大学院の充実策
- (四) 財政改革とりわけ人件費削減の改革と、施設設備の充実・改善資金の捻出
- (五) 進展する国際化対応と社会貢献の促進

(一)教育の本来の目的を一口に言えば、人格の陶冶と知識学力の向上ですが、教える側が躍起になっても、受ける側が「学ぶ」姿勢を持たない限り効果が期待で

きません。本学院の建学の理念である独立自彊の精神の涵養は、まさしく自分から進んで(自主)、他から束縛や強制されることなく(自由)、主体的に自分の力を頼りにして(自立)物事を深く考え、研究し、本質を見抜く力を養うことにあります。ですから、幼稚園から博士課程までの各教育段階において、学ぶ者が自ら「未知を既知たらしめる努力」を重ねるように、全教育職員が一致して指導していかなければ、と考えております。

(二)では教育改革の具体的な効果向上策は?と問われる時、私は(ア)語学(特に国語と英語)教育の強化(イ)コンピューター教育の徹底(ウ)社会連携による実学教育(エ)いわゆる「高大」連携のように、総合学園としての強みを発揮する連携プログラムの推進とこれらの教育改革に寄与する研究体制の整備、をあげたいと思います。

(三)予算規模からいって学院全体の七割近くを占める大学がまずしっかりしなければ学院の社会的評価は上がりません。そのためには大学での教育改革の推進が真っ先に取り上げられるべきです。幸い今年度からセメスター制が始まりましたし、インターンシップの導入、キャリア開発部の設置など、実学教育の振興策が展開されました。今後附置研究所の整備充実などを進め、「特色ある教育と研究」を促進していきたいと考えています。もちろん時代の要請する学部や学科の改組(例えばベンチャー学科の新設など)転換や地元茨木市と提携したいいわゆる「サテライト大学」の設置なども視野に入れた改革構想も展開しなければなりません。

(四)にいった改革は、もちろん財政基盤の強化があってこそ可能です。「入るを計って出づるを制す」がその要諦ですが、消費支出の一層の節減や各種補助

金の獲得に向けての一段の注力、昨年導入した「ゼロベース予算」の徹底、消費収支の黒字化と積極的な基本金組み入れ等々、きめ細かい財政再建策の展開を図ります。この際一番の重要課題は人件費の削減ですが、職能資格制度の浸透と業績評価中心主義制度の確立、非常識ともいべき期末手当の合理的削減等多面的な改革手段を一段と強く押し進め、それによって老朽化や狭隘化著しい学舎の新増改築や最新の教育工学機器の導入によって教育効果と研究成果の飛躍的上昇を実現したいものです。

(五)私は、「国際化とは異国の文化の相互理解とその促進」と考えております。グローバル時代と言われてから久しく、それゆえに学院はいくつかの国の大学や高校・中学との提携を進めてきました。今後小・中・高・大全部が一緒になって国際化に取り組み、国際感覚豊かな人材の育成にあたります。また本学院での研究や教育の成果を公開講座等を通して積極的に社会に還元したり、各種の媒体を通して有意な情報を受発信することに力を入れ、社会貢献責任を果たしていきたいと思っています。

山桜会から私に求められた表題は「学院の現状について」ですが、現状では正直に申し上げて「大変だ」という以外に適当な表現が見つかりません。長年の自由と放縦の混同や安易なアウトソーシング、管理職のリーダーシップ不在、脆弱な財政基盤等々現状に対する不満を数え上げれば次々と出てきますが、今さら愚痴ってみても何も前進がありません。それゆえ、今後どういう方向に進んでいくべきか、私見の一端を率直に申し上げ、山桜会の皆様方の忌憚のないご批判を仰ぎたく思いました。

今後も山桜会と学院が手を取り合って「より良き追手門づくり」を目指して進みたいと存じますので、変わらぬご支援を幾層にもお願いいたします。